

# 「好文本」考

——天神信仰とのかかわりを中心に

韓 雯

## 要旨

日本中世の説話、軍記物語、謡曲などに、「学問を好む木」——「好文本」という梅の別称が見える。鎌倉時代の説話集『十訓抄』に初出し、『晋起居注』に見える中国の皇帝が学問を好むと梅の花が咲き、学問を怠れば梅の花が散るという話に由来すると言われている。

しかし、出典とされる『晋起居注』について考察すると、内容、主人公の人物像、梅のイメージなどの面から、いくつかの問題点が浮かび上がった。それにひきかえ、「好文本」の話は日本ではよく天神の飛梅伝説と結びつき、とくに天神信仰が流行する中世から盛んに説かれていたことに気づいた。小論は、天神信仰と梅の関係をめぐって、「好

文本」説話成立のルートを考察したものである。

キーワード…好文本、天神信仰、飛梅伝説、渡唐天神

大陸より渡来した梅は、万葉時代から日本人に多く詠まれ、気品と風雅を代表する花として親しまれてきた。『万葉集』の植物の中で二番目多く詠まれ、平安時代の和歌文学と物語、随筆などに重要な位置を占めている梅は、中世になると、説話、軍記物語、謡曲などにも姿を現すようになった。その時、「学問を好む木」——「好文本」という別名が与えられていた。

中国の皇帝が学問を好むと梅の花が咲き、学問を怠れば梅の花が散るという「好文本」の話は鎌倉時代の説話集

『十訓抄』に初出し、後に謡曲にも取り上げられ、室町期の五山文学、江戸漢詩などにも見られ、また江戸期の浄瑠璃、歌舞伎などの戯曲文学にも用例が見られる。今でも、梅の名所、茨城県水戸市の偕楽園に「好文亭」という建物があり、中国の故事で梅を好文木と称したことに由来すると言われている。

その好文木の話の出典について、すでに疑問を抱く人は何人かいるが、この問題を深く追究する人は、筆者が調査した限りはまだ見当たらないようである。筆者は本章で、好文木の出典と漢籍との関係について考察してみた。

## 一 梅の異称「好文木」及びその出典

『日本国語大辞典』の解説によると、<sup>①</sup>

好文木（こうぶんぼく）Ⅱ「一」「名」□（中国、晉の武帝が学問に励んでいる時は梅の花が開き、学問を怠る時は散りしおれていたと「晉起居注」に見えたといわれる故事から）梅の異称。《季・春》\*十訓抄□六・道真旧宅梅枝飛于太宰府事「唐国の帝、文を好み給ひければ開き、学問怠り給へば散りしをれける梅は有り

ける。好文木とぞ云ひける。」（以下略）

「好文木」は梅の異称であり、文献上の初出は鎌倉中期に成立した仏教説話集『十訓抄』であるとされる。

『十訓抄』巻第六「忠直を存すべき事」の第十七話に、天神伝説にまつわる貞木の松と大宰府飛梅の話述べた後、

唐国の帝、文を好み給ひければ開け、學問おこたり給へば散りしほみける梅はありけれ。好文木とぞいひける。<sup>②③</sup>

というエピソードが付け加えられた。

室町時代になると、世阿弥作とされる謡曲「老松」と同時期の作者不明の謡曲「軒端梅」にも、好文木の話が出てきた。「老松」の原文を引いてみると、<sup>③</sup>

諸木の中に松梅は、ことに天神の、ご慈愛にて、紅梅殿も老松も、みな末社と現じ給へり。さればこの二つの木は、わが朝よりもなほ、漢家に徳を現はし、唐の帝のおん時は、国に文学盛んなれば、花の色を増し、

句・ひ・常・より・勝・り・た・り・、文・学・廃・れ・ば・句・ひ・も・な・く・、その・色・も・深・か・ら・ず・、さ・て・こ・そ・文・を・好・む・、木・な・り・け・り・と・て・梅・を・ば・、好・文・木・と・は・付・け・ら・れ・た・り・、さ・て・松・を・、大夫・とい・ふ・ことは、秦の始皇のみ狩の時、天にはかにかき曇り、大雨頻りに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松の蔭に寄り給ふ、この松にはかに 大木となり、枝を垂れ葉を並べ、木の間透き間を塞ぎて、その雨を洩らさ ざりしかば、帝大夫といふ、爵を贈り給ひしより、松を大夫と申すなり

前述の『十訓抄』説話の影響を受けたことは明らかであろう。天神道真が愛した松と梅が、中国でも徳性をもつ植物として珍重されていると述べている。謡曲によると、梅と松は中国の皇帝にそれぞれ「好文本」、「大夫」という名を与えられ、その品格が高く評価されている。

そして、謡曲「軒端梅」は、和泉式部と東北院の梅にまつわる話であり、「好文本」についての詳しい記述は見当たらず、単なる梅の異称として登場している。ゆえに、流派によりこの謡曲のタイトルも、「好文本」「東北院」「東北」とも称されている。

しかし、それらの記述は、中国の故事から来たと言いな

がら、具体的な出典を示したものは見当たらない。引用する故事の時代を明示するものもなく、主人公も「唐国の帝」と漠然と言っているだけである。

とくに、謡曲「老松」に、「好文本」故事の後に秦の始皇帝が泰山の松の下で雨宿りをしたため、松に大夫の爵を賜ったという話を添えた。その話は『史記』に見え、今に至っても中国では有名な伝説である。それに比べると、好文本の記事は短く、出典も明確にされていないことは不自然である。

はじめて「好文本」の出典に触れた書物は、文禄四年（一五九五年）豊臣秀次の命により、山科言経や五山の禅僧らが謡曲百番の語句を注した『謡抄』である。原文は以下のようである。

梅ヲハ好文本トハ付ケラレタレ管起居注哀帝讀書則四時隨之開花故好文本ト云東晉ノ王ニ哀帝ト云王アリ此王ノ物ノ本ヲミテ書ヲヨメハ春ニテナケレトモ何時モ讀タヒニ梅カ開タルニヨリテ文好木ト云也<sup>4</sup>

好文本の出典を『晋起居注』と明示し、主人公を晋の哀帝としている。

さらに江戸時代の儒者人見卜幽軒の随筆『東見記』にも、

梅を好文木と云ふ。故事は晉の起居注に在り。晉武文を好むときは則ち梅開く、學を廢するときは則ち梅開かず。云々

（原文「梅云好文木故事在晉起居注 晉武好文則梅開廢學則梅不開云云」）

同じく『晉起居注』を出典とするが、主人公を晉の哀帝から武帝に変えた。

「好文木」出典に触れた書物は、以上引用した『謠抄』と『東見記』以外は見当たらない。現代の各辞書及び『十訓抄』、謠曲の注釈書はほとんどその二つの書物を参考にし、『晉起居注』が出典と説明している。

しかし、『晉起居注』という書物はすでに散逸してしまい、今見ることができない。しかも、その「好文木」の出典について、疑問を抱いた人は少なくない。

室町中期の臨濟宗の僧瑞溪周鳳が日記『臥雲日件録』の中で、

又及天神之事、名梅曰好文木有本據否、或曰、天神詩有之、又曰白樂天來日本、與住吉大明神相逢、樂天作詩有白雲如帶繞山腰之句、蓋俗説未見所出。<sup>5)</sup>

天神が愛する梅を好文木と呼ぶことは、白樂天が日本に來た伝説と同じく、その信憑性はかなりあやしいと述べている。唐の白樂天が日本の知恵を探りに來日し、住吉明神が和歌をもつて対抗し、船もろとも追い返すという伝説は中世あたりから現れ、それを題材に謠曲『白樂天』が創作された。しかし瑞溪は、それらの説話について、いずれも出典が見つからないため、俗説に過ぎないと主張している。

さらに、江戸後期隨筆作家、雜學者である山崎美成も、隨筆『三養雜記』にこの問題について詳しく見解を述べた。

梅を好文木といふことは軒端梅の謠曲にありて、人の知ことなれども、唐土の書にはたえて見えざることなり、臥雲日件録にも見えなれば、ふるく故事とすることとおもはれたり、さてその来所は、謠古抄に、好文木、晉起居注云、哀帝讀書、則四時隨之開華、故好文木と云なり、また東見記に、梅云好文木、故事在晉起居注、晉武好文則梅開、廢學則梅不開云云とあり、武帝哀帝いづれか是なりや、説郭などにも、起居注はくさくさ収めたれど、好文木の事は見えず。

謠曲などに見える「好文木」という梅の異称は、漢籍に見

えないのである。出典を指摘した『謡古抄』と『東見記』の記述も主人公が異なっている。さらに、元末明初の陶宗儀が撰した叢書「説郭」には、起居注をいろいろ収めたが、好文木のことは見えないと指摘し、「好文木」の出典について疑問を抱いている。

近代の学者でも、

中国では好文木の字はみられない。むしろ日本でつくられた言葉であろう。<sup>(6)</sup>

と疑問を感じる人もいるが、筆者が調べた限り、その問題を深く研究する人はいないようである。これから、「好文木」の出典とされる『晋起居注』について、考察していきたい。

## 二 出典の信憑性について

まずは出典と言われる『晋起居注』はどのような書物なのかを見てみたい。『起居注』とは、中国の皇帝の毎日の起居、言行を記録した日記体の文書である。隋、唐より制度化され、現存するのは明末の一部と清代のものがある。

『隋書』卷三十三、志第二十八、経籍部の記録によると、晋代には起居注類が二十種以上存在したとされる。その中

で晋武帝関係の起居注は李軌が撰した『晋泰始起居注』（二十卷）、『晋咸寧起居注』（十卷）があり、哀帝関係の記事は撰者不明の『晋隆和興寧起居注』（五卷）に収録されていたと考えられる。そのほかにも、南朝宋の劉道会が撰した『晋起居注』（三百一十七卷）も存在した。これらの起居注の原書はいずれも散逸しているが、『芸文類聚』や『太平御覧』などの類書にしばしば引用され、記事が散見している。清代の黄奭が当時の文献に引かれた晋起居注の逸文を集めて輯本を編纂したが、この「好文木」の記事は見えない。

ただし、『晋起居注』といえば、『日本書紀』卷第九の神功紀に引用されることでよく知られている。<sup>(7)</sup>

六十六年。是年、晋の武帝の泰初の二年なり。晋の起居の注に云はく、武帝の泰初の二年の十月に、倭の女王、訳を重ねて貢獻せしむといふ。

（原文 六十六年。是年、晋武帝泰初二年。晋起居注云、武帝泰初二年十月、倭女王遣重訳貢獻。）

晋武帝の泰初二年十月に、倭の女王が貢ぎ物を献上した記事であり、日本の上代史、日中交流史を研究するための貴重な史料である。小学館新編全集『日本書紀』神功紀の

この条の注釈に、「晋泰始起居注二十卷」（李軌撰）の名は『隋書』経籍志にみえる」とあるが、それが書紀に引かれた『起居注』であるかどうかは明確にされていない。

平安初期藤原佐世が撰した『日本国見在書目録』に、「起居注家三十九卷」の中に、「晋起居注」卅卷」という記録が見える。<sup>(8)</sup>しかし、その撰者も明記されていないため、李軌撰の泰始・咸寧両起居注を合わせた写本とも考えられるし、劉道会撰の三百一十七卷の起居注の一部とも考えられると考える。

こうして見ると、「好文本」の出典を『晋起居注』にするのは事実上なんの問題もないように思われるが、問題は『晋起居注』が『日本書紀』で引かれて以来、ほかの日本の書籍に現れることはない。そして五百年以上の時間を隔てる『十訓抄』に初めて「好文本」の説話が引かれ、またその出典を『晋起居注』と指摘した『謡抄』は『日本書紀』から八百年も離れたのは、考えれば非常に不自然なことなのではないか。

しかも、現存の中国の類書に引かれる『晋起居注』の内容を見た限り、皇帝の日常生活、官職の任免、后妃、太子の廃立、朝廷の政策、制度など政治的な記事がほとんどである。そもそも政治を中心に皇帝の日常生活を記録する起居注に、梅を好むといった風流な逸話を収録する余裕があ

るかどうかも疑わしい。

それに、『十訓抄』にも「老松」にも、この説話の主人公を明確にされていない。もしほんとうに奈良時代にすでに伝来した『晋起居注』の中の説話だったら、どうして皇帝の名前を示さず、「唐の帝」と漠然と言ったのかも理解しにくい。

以上は『晋起居注』の内容から、好文本説話の信憑性について私見を述べたが、それから、説話の主人公、晋の武帝あるいは哀帝はどのような人物なのかを見てみよう。晋代の歴史を記録する『晋書』における二人の伝記をまとめてみた。以下のようなのである。

晋の武帝とは、晋の初代皇帝、司馬炎のことである。武帝は、司馬懿の孫、司馬昭の子であり、魏の元帝に迫って讓位させ、洛陽に都を定めたのである。二八〇年呉を滅ぼし天下を統一し、律令を整備し、占田法・課田法を施行し、九品官人法をさらに整備したなどで知られている。晩年になると、後宮に美女一万人を集め、女色に溺れたエピソードも伝わっている。

哀帝とは、東晋の第六代皇帝、司馬丕のことである。その治世には、穆帝時代に洛陽奪還などの功績で実力者となっていた桓温が実権を握っており、哀帝自身はほとんど傀儡同然であった。そのためか、哀帝は不老長寿を求める

長生術に没頭し、政務を顧みなかった。ついには薬の乱用の結果、中毒死したという結末になった。

『晋書』から見る限り、武帝は武力を重視する皇帝で、哀帝は傀儡同然の暗君として世に知られ、二人とも学問を重んじ、あるいは学芸に長ける記事が見当たらない。そのような二人を「好文木」の故事と結びつけるのは違和感を禁じ得ない。

最後に、梅のイメージから見てもその説の信憑性を疑うのであろう。これまで述べられたように、中国の文学史において、梅の花が賞美され、詩文で詠まれた風潮は六朝時代の梁、陳から生じたとされ、それより前の晋の時代には、人々は梅の実を調味料として用いたが、未だに梅の花を賞美の対象として認識していなかったらしく、それを詠む文学作品もほとんど見当たらない。

また、国運の隆盛を象徴する祥瑞動物、植物の話は中国に多く見えるが、だいたい鳳凰、麒麟や靈芝などがよく取り上げられ、梅花を祥瑞物と捉える例はほとんどない。

それに、中国の古典詩文の中で、梅の花は女性、恋愛、節操、君子などの象徴とされているが、学問と結びつくイメージはほとんど見えない。梅が最初に文人たちに注目されたのは、その春先に一番早く咲く特性である。春を告げ

る使者として、歴代の文人に親しまれている。また、六朝と初唐期には、その散りゆくさまがよく閨怨詩に詠まれ、女性の弱弱しく、かわいらしい姿を髣髴させる。晚唐期になると、人々は梅の厳寒に耐える特性に気づき、それを君子の節操に譬える傾向が現れてきた。宋代になると、そのイメージがさらに定着し、梅は君子というイメージが主流となっていた。つまり、中国の文人の認識の中で、梅は上品な花、高潔の花、風骨のある花として捉えていたが、それを学問、文道の花という捉え方はほとんど見えない。それにひきかえ、日本では渡来植物である梅を大陸文化の代表として昔から尊重されている。『万葉集』に

梅の花 夢に語らく みやびたる 花と我思ふ 酒に  
浮かべこそ 詠み人知らず (巻五・八五二)

とあり、中国趣味が溢れる梅を「みやび」の花と認識している。そのイメージは平安時代に受け継がれ、王朝人の和歌や物語に多く登場し、雅の宮廷生活の象徴となっている。ゆえに梅が学問、風流などのイメージと結びつくのは、むしろ日本特有の文化から生じたのではないかと思われる。

以上は、『晋起居注』の内容考察、晋武帝、哀帝の人間像、中国における梅のイメージという三方面から「好文木」の出典について疑問を述べた。

### 三 天神と梅——飛梅伝説

では、もし「好文木」の話は中国の故事ではなく、日本人が作り出したものとしたら、その根源をどこに求めばいいのか。

『十訓抄』と謡曲「老松」に登場する「好文木」説話は、いずれも天神飛梅伝説の後ろに続き、それに付属するような形をとっていることに注目してもらいたい。後に触れるが、「好文木」を詠じる五山漢詩も、江戸歌舞伎の台本も、いずれも天神信仰とかわわっている。これは単なる偶然ではなく、日本天神信仰との関連性を示唆していると考えらる。

日本で梅と学問を言えば、誰もが想起する文人は、天神様、菅原道真であろう。平安前期の貴族、学者かつ政治家である菅原道真は、醍醐朝では右大臣にまで昇ったが、左大臣藤原時平に讒訴され、大宰府へ権帥として左遷され現地で没した。死後天変地異が多発したことから、朝廷に祟りをなしたとされ、天満天神として信仰の対象となる。最

初は火雷天神と呼ばれ雷神信仰と結びついたが、現在は学問の神として親しまれている。その天神様のシンボルとも言われる植物は、まさに梅である。

さらに、「好文木」の最初の出典である『十訓抄』の作者について、今は定説がないが、菅原為長説がその一つとして挙げられる。その主な理由として、『十訓抄』において道真をはじめ、文時、輔昭、長貞など菅家一族に関する説話が多く見え、為長はまさに道真の子孫である。それはおそらく作者の好尚によって偶然に選り取られたのではなく、「菅家に由縁のある人物が祖先の偉業を讃えたと共に、その誉れを荷なう菅家一族の権威を世に示すために、意識的にこれらを採録した」と指摘されている。<sup>9)</sup>『十訓抄』の中に、文道の神様として崇められた道真を賞賛した説話が多い。好文木は飛梅伝説の後ろに付随されたもので、おそらくその信憑性を強めるために作られた話なのではないかと推測できよう。

これから、天神と梅の関係から、「好文木」と道真とのかわりについて論じてみたい。

道真は梅をこよなく愛好することでも世に知られている。その漢詩集『菅家文章』に梅を詠む漢詩が多く見える。一例をあげると、『菅家文章』の巻頭に収まった、道真十一歳の処女作「月夜見梅花」<sup>10)</sup>である。



月耀如晴雪  
梅花似照星  
可憐金鏡轉  
庭上玉房馨

月の耀くは晴れたる雪の如し  
梅花は照れる星に似たり  
憐れぶべし 金鏡の轉きて  
庭上に玉房の馨れることを

月光の中で白く輝くように見える梅の姿とそのぼんやりとした香りを詠んでいる。

梅を愛好する道真は、自宅の庭園にも梅を植えていた。『菅家後集』の中に、道真が四十九歳の時に記した「書斎記」が収録され、自宅の宣風坊の庭に、白梅が植えられていたという記事が見える。次のごとくである。

戸前近き側に、一株の梅有り。東に去ること数歩にして、数竿の竹有り。花の時に至る毎に風の便りに当たる毎に、以て情性を優暢すべく、以て精神を長養すべし。

（原文 戸前近側、有一株梅。東去数歩、有数竿竹。每至花時、每當風便、可以優暢情性、可以長養精神。）

その宣風坊の梅を道真が程よく愛し、五十八歳の時、すなわち死ぬ前年の春に書いた「梅花」という詩に、その梅を思い出した句が詠まれる。

宣風坊北新栽處 宣風坊の北 新に栽ゑたる處

仁壽殿西内宴時 仁壽殿の西 内宴の時  
人は同人梅異樹 人は是れ同じき人 梅は異なる樹  
知花獨笑我多悲 知んぬ 花のみ獨り笑みて 我は  
悲しびの多きことを

左遷された道真は、梅を見ると京の自邸の梅花や、宮中の仁寿殿の梅花を思い出した。花と人を対照し、今の不幸な境遇に深く嘆いている。

このように、道真は梅を単なる詠物の詩材として扱われるのみでなく、「時に、自分が分身とも見、また情を有する物として語りかけ、梅花をして己が心情を語らしめようとする」のである。<sup>①</sup>

しかしながら、道真の漢詩の中で、梅以外に、菊と竹も同様に多く詠まれ、心情を寄せられている。道真と梅を密接な関係で結んだのは、世にも著名な飛梅伝説である。

飛梅伝説とは、道真が京の邸宅に植えた梅が、九〇一年（延喜元年）、道真が大宰権帥として左遷されると、あとを慕って一夜にして大宰府に飛んできたという逸話である。

『拾遺和歌集』に、

流され侍りける時、家の梅の花を見侍て

東風吹かば にほひをこせよ 梅花 主なしとて

春を忘るな

道真（拾遺・十六・雜春）<sup>12</sup>

四 天神と梅——渡唐天神伝説

という歌が詠まれ、『大鏡』『宝物集』にも類似するエピソードが載っている。鎌倉時代に成立した『北野天神縁起』には、道真の邸宅を「紅梅殿」と記し、その梅は道真を慕うため大宰府に飛んだという逸話が付け加えられている。それが後世に広く伝わる「飛梅伝説」である。

そして、最初に雷神として北野天満宮で祀られていた天神が、天変地異が治まってくると、次第に学者や文人としての才能が目が向けられ、円満実直な学問の神として人々に崇められるようになっていく。九八六年、慶滋保胤が北野天満宮に捧げる祈願文の中で「天神を以て文道の祖、詩境の主」と語り、またその後の一〇一二年、当時の文章博士大江匡衡が同じく祈願文の中で「文章の大祖、風月の本主」と言ったことから、この後、菅原道真は「雷神」ではなく「学問の神様」として祀られるようになった。

学問の神である天神は、中世に入ると、その信仰がさらに広まり、とれにともなって飛梅伝説も盛んに説かれ、さまざまな新しい要素が加えられた。

天神と梅の関係について、前述した「東風ふかば」の歌が名高いのは言うまでもない。しかしその和歌は、意外なことに、「のちに道真愛梅伝説が定着してから人口を膾炙したものと考えられている」<sup>13</sup>。学者の考証によると、鎌倉期の天神縁起などで、道真の梅と同様に桜を愛した様が窺え、特に梅だけがクローズアップされているわけでもない。どうしてその後に梅と天神が結びつけたかというところ、それは五山文学と深くかわっていたのである。

五山文学では、その規範となった中国の宋、元時代の漢詩に梅花が盛んに詠まれ、林和靖、蘇軾や陸游らの名作は日本の禅僧たちに愛読されたゆえ、五山文学の中でも梅を詠む詩が多く作られている。一方、五山の禅僧たちは学問の神様である天神道真をことのほか尊重し、天神の絵を描き、賛を書くことは彼らの詩に記されている。

こうして中国詩の影響を受け、梅花趣味を持っている禅僧たちは、天神信仰と梅を結び付けると想定し、天神を詠む詩の中にほとんど梅が登場している。<sup>14</sup>

北野天神

（愚仲周及『叩餘集』）

十一面圓通大士、和其光謂之天神。陰陽實是不可測、  
飛梅萬里早回春。

天神

(景徐周麟『翰林葫蘆集』)

傳得金欄在半肩、龍孫龍子出龍淵。夜深月下動鱗甲、  
一朵飛梅九五天。

など、飛梅伝説を踏まえて詠んだ詩が多く見える。また、  
「好文本」という語も散見し、天神とかかわるものが多い。  
一例をあげると、

次飛梅韻

(夢巖祖應『早霖集』)

好文不負逐臣盟、無翼清名海國春。安樂窩中當日事、  
巡簷索笑一番新。

というふうには詠んでいる。

さらに、室町中期から、平安時代の道真がはるか後代に  
あたる中国宋代の禪僧である無準師範の弟子となり、伝法  
の証しである法衣を受けたといういわゆる渡唐天神伝説が  
語られ始めていた。それは中世流行の禪の思想が日本従来の  
の天神信仰と習合していると考えられ、この説話に基づい  
て多くの渡唐天神の像が描かれた。絵の中に、天神が仙冠

をかぶり、中国の道士服を着、手に一枝の梅をもつポーズ  
が特徴である。その画賛も多く見える。

北野天神肖像並敘

(岐陽方秀『不二遺稿』)

菅丞相薨爲天滿神。事見釋書神仙傳。世謂徑山圓照夢  
天神。深衣大帶手携洪梅一朵。而來進執弟子禮。誓爲  
護法神。……

天神

(景徐周麟『翰林葫蘆集』)

袖挿紅梅當瓣香、朝歸北野夜餘杭。冤心一段九州鐵、  
文武爐中雪沃湯

序に「今之所繪者、易朝服携梅花、其深閨靜幾、試筆  
墨之間、不著一點俗氣者」とある。

藤木英雄氏に従えば、ちょうど渡唐天神像が成立発展し  
た室町時代応永頃から、禪僧らの梅花を詠む詩が特に増え  
てくるという<sup>15)</sup>。また、天神が無準のもとに参じたのは、参  
禅ではなく江南の梅花を尋ねるためとする解釈さえ現れて  
いた<sup>16)</sup>。

要するに、梅花を持つ渡唐天神像は、中国からもたらさ  
れた梅花詩の影響による日本の詩僧らの梅花趣味と時を同  
じくして広まっていったと考えられる。当時の禪僧らの目  
には、渡海して禪の高僧に参じた日本の詩文の神に、梅花

というアイテムがまことにふさわしいものとして映っていたにちがいない。

その渡唐天神の話は後世に伝わり、江戸時代の浄瑠璃『天神記』（近松作）や歌舞伎『天満宮葉種御供』（作者不詳）に、道真伝説に絡んで「梅」が活躍する中、「好文木」の話も登場している。後者の内容を簡単にまとめると、

唐より天蘭敬という使者が日本を訪れ、彼は「好文木」（梅）を献上してきたのである。それは道真が夢の中で唐に渡り、皇帝に望んだものであった。道真は天蘭敬の前で梅の枝を折って袖に包むと、梅の花がぱつと開く。見ていた時平は、「ははあ、奇なるかな、妙なるかな。花物言わぬと主を知り、開けし花は天蘭敬が詞に違わぬ好文木。是に道真卿が文学に秀でし事を思われよ」と誉めるのであった。<sup>17</sup>

天神が夢の中に渡唐した構想は、中世の「渡唐天神」の伝説から来たと考えられる。しかし、この話に登場する「好文木」は、唐の帝ではなく、道真によって咲かせたのである。梅は、道真の学問を代表するシンボルとして後世に定着したことが窺えよう。

そして、前述した「好文木」の出典を指摘した最も古い書物『謡抄』も、五山の禅僧らの手によって作られたものである。おそらく『謡抄』が撰された時は、すでに渡唐天

神像などによって、天神と梅との関連性が一般的な認識となり、好文木の伝説も定着していたと思われる。それで、その伝説に信頼性を高めるため、明確な出典を与えなければならぬと考え、『晋起居注』の名を挙げたのではないか。

要するに、五山の禅僧たちの愛梅趣味と天神崇拜により、天神さまのシンボルである梅は自然に学問のシンボルとなり、「文を好む木」のイメージが定められたと考えられよう。

## 五 「好文木」説話の成立試考

では、どうして「好文木」の出典を『晋起居注』にし、主人公を文学と無縁に見える晋武帝、もしくは哀帝にしたのか。筆者は、この「好文木」の説話は、まったく漢籍の影響が見えないとも思えない。これから、漢籍の影響からその成立のルートについて考察を試みたい。

まず、「好文」というキーワードを中国の古典で探すと、梅とは無関係であるが、「文を好む即ち……」といえ、容易に想起されるのは、黄帝と鳳凰の説話である。

『竹書紀年』<sup>18</sup>という史書の中にその話が初出し、以下のとおりである。

五十年秋七月庚申、鳳鳥至、帝祭<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>洛水<sub>一</sub>。庚申天露、三日三夜晝昏。帝問<sub>二</sub>天老、力牧、容成<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>於<sub>二</sub>公何如<sub>一</sub>？天老曰、臣聞<sub>レ</sub>之、國安、其主好<sub>レ</sub>文、則鳳凰居<sub>レ</sub>之。國亂、其主好<sub>レ</sub>武、則鳳凰去<sub>レ</sub>之。今鳳凰翔<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>東郊<sub>一</sub>、而樂之其鳴音、中夷則與天<sub>二</sub>相副<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>是觀<sub>レ</sub>之、天有<sub>二</sub>嚴教<sub>一</sub>以賜<sub>レ</sub>帝、帝勿<sub>レ</sub>犯也。

黃帝の治世に鳳凰が飛び来たため、帝は洛水で祭祀したら、三日三夜に亘って霧がかかっていた。帝は大臣たちにこの現象が発生した原因を聞いたら、天老という大臣は、「私は、国が安定し、その君主が文を好めば、鳳凰がやってくる。国が動乱し、その君主が武力を好めば、鳳凰は飛び去っていくと聞きましたが、今鳳凰が飛んできたのは、天がなんらかの教えを帝に与えないのですか」と説明した。後に黃帝は川から不思議な書物を得、それが有名な河圖洛書である。

さて、この話の中の「國安其主好文、則鳳凰居之。國亂其主好武、則鳳凰去之」は「晉武好文則梅開、廢學則梅不開」と非常に類似しているのではないか。

この鳳凰の話は中国で広く知られ、孔子が『論語』の中にもこの話を踏まえ、「鳳鳥至らず。河、図を出さず。吾

已んぬるかな」(子罕編)、今吉兆を予告する鳳凰も至らず、河から図も現れない。私は、どうしようもない、と世の中を嘆いている言葉が有名であり、おそらく日本人も熟知していると考えられる。

和漢の故事を広く説く『十訓抄』の作者も、その話を知ったはずであり、鳳凰の「好文即翔」を梅花の「好文即開」に変えて作ったのも考えられる。

そして、この鳳凰の「好文即翔」の話は、歴代の類書にも頻繁に引かれている。例えば、

『太平御覽』(宋 李昉撰)卷九百十五、羽族部二、「鳳」条に、

又曰國安其主好<sub>レ</sub>文則鳳凰翔

『冊府元龜』(宋 王欽若・楊億ら撰)卷二十二、「鳳」条に、

……天老曰臣聞之國安其主好<sub>レ</sub>文則鳳凰居<sub>レ</sub>之國亂其主好<sub>レ</sub>武則鳳凰去<sub>レ</sub>之……

『玉海』(宋 王應麟撰)、卷一百九十九、「祥瑞動物鳳」条に、  
天老曰國安其主好<sub>レ</sub>文則鳳凰居<sub>レ</sub>之……

などが見える。

そのほかに、『喻林』卷七十七(明徐元太撰)、『天中記』(明陳耀文撰)、『山堂肆考』(明彭大翼撰)などの類書にもこの故事を引用している。

五山の禅僧たちは『太平御覧』や『冊府元龜』などの類書を作詩の参考書として勉強していたことは世に知られている。現に『太平御覧』の写本としては、日本に伝来した一一九九年（慶元五年）の蜀刻本の残本九四五巻が知られ、現在京都五山第四位の臨濟宗東福寺にも宋版『太平御覧』が所蔵している。

そして、前にも触れたように、『晋起居注』は散逸してしまっただけとはいえ、その断片的な記事は『芸文類聚』、『太平御覧』などの類書に引かれている。それが「鳳凰好文」と『晋起居注』と結びつく一つの接点になるのではないか。

また、「好文本」の説話を『晋起居注』と結びつけるもう一つの理由は、前述のように、『晋起居注』は『日本書紀』の神功皇后の記事に引かれることで知られる。神功皇后は日本史において謎多き人物であり、卑弥呼や台与と同じような巫女王であったとする見方もあるほどである。彼女についての記事が載っている『晋起居注』は、おそらく日本人にとって、遙かなる唐国の逸話を記録した不思議な書物と認識されていたのではないか。そして、文を好めば花が咲くという不思議な説話の出典にしてもなんの不自然もないのであろう。

主人公を晋の武帝とするのも、『日本書紀』から由来し

たとも考えられ、また、武帝が晋の初代皇帝として有名なので、現存する『晋起居注』の断片的な記事の中でも、武帝に関するものが多い。一方、哀帝については、現存の晋起居注の記事にまったく登場していないため、彼を選定した理由は未だに推測できかねるが、これからの研究課題として考察を深めたいと考える。

## 六 結語

以上述べてきたように、「好文本」という梅の別称は、中国の故事に由来すると言われてきたが、しかし出典とされる『晋起居注』について考察すると、いくつかの疑問点が浮かび上がった。まずは、現存する『晋起居注』の断片から見れば、内容はほとんど皇帝の日常生活、官職の任免、后妃、太子の廃立、朝廷の政策、制度など政治的な記事であり、梅を好むといった風流な逸話を収録する余裕があるかどうかは疑わしい。そして、話の主人公とされる晋の武帝・哀帝は、史料を見た限り文学と無縁の人物のようである。それに、漢詩文における梅は、「文学を好む」というイメージと結びつけるのはほとんど見当たらない。

それに対し、「好文本」の話はよく天神の飛梅伝説と結びつき、天神様の靈験譚のひとつとして作り上げられてい

る。とくに天神信仰が流行する中世から盛んに説かれてきた。ゆえに、この話は中世の天神信仰の影響のもとで、梅を愛好する五山の禅僧たちによって作り出されたのではないかと筆者は主張したい。

「好文本」は渡唐天神の話と同じく、天神信仰と漢文学の融合によって作り出された話と考える。その異名は、今でも梅の雅称の一つとして、文道の神——天神とともに、日本人の心に残されている。

小論は、「好文本」説話成立ルートの考察を試みとして、私見を述べてみた。むろん、この問題は非常に難解であり、歴史的な考証もしなければならない。未熟な考えや未解決な問題も多いと思うが、これからの課題として研究を進めていきたい。

【注】

- (1) 『日本国語大辞典〔縮刷版〕四』小学館・昭和四十九年一月十日日本国語大辞典第七巻発行、昭和四十九年三月一日同第八巻発行、昭和五十五年四月二十日同縮刷版第一版第一刷発行による。
- (2) 本文は、浅見和彦校注・訳、新編日本古典文学全集『十訓抄』（小学館、一九九七年、二三九頁）による。
- (3) 本文は、横道万里雄、表章校注、日本古典文学大系『謡曲集』（岩波書店、一九六〇年）による。

- (4) 『謡抄』の本文は、京都大学附属図書館所蔵の『謡抄』の映像によるものである。
- (5) 本論に引用される『臥雲日件録』と次の『三養雜記』は、『古事類苑』植物部六「梅」条による。
- (6) 吉田光邦「日本のなかのウメ」、『日本の文様』3 梅（光琳社、一九七〇年）
- (7) 原文及び注釈は、小島憲之、直木孝次郎ほか、校注・訳『日本書紀』①（小学館、一九九四年四月）による。
- (8) 『續群書類從』巻第八百八十四、雜部三十四
- (9) 乾克己「十訓抄と菅原道真の説話」、『和洋国文研究』二七、平成四年三月
- (10) 原文及び訓読は、川口久雄校注、日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、一九七二年）による。
- (11) 波戸岡旭「菅原道真詠梅考」、『国学院雑誌』九五—三、一九九四年三月
- (12) 小町谷照彦校注、新日本古典文学大系『拾遺和歌集』岩波書店、一九九〇年
- (13) 福島恒徳「天神と渡唐天神——天神信仰と天神像の諸相」『禪と天神』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
- (14) 五山漢詩の本文は、上村観光編『五山文学全集』電子版（花園国際禅学研究所 [http://rizhazanonoac.jp/frame/k-room\\_f3.htm](http://rizhazanonoac.jp/frame/k-room_f3.htm)）による。
- (15) 藤木英雄「渡唐天神画像をめぐる——五山文学の一断面——（上）（下）」、『禅文化』一九七六年三月号、九月号
- (16) 朝倉尚、「賛渡唐天神詩寸見——希世『北野神君詩』（仮題）

について」、「岡山大学教養部紀要」十七、一九八一年二月

- (17) 梅花女子大学日本文学科編『梅の文化誌』（和泉選書、二〇〇一年）の第六章「心ありげなこの早咲き——近世演劇の中の『梅』」をご参照。

- (18) 本論に引用される『竹書紀年』及び『太平御覧』などの類書の本文は、『文淵閣四庫全書』によるものである。

(Han Wen、本学大学院文学研究科人文専攻博士後期課程)